

スマトラ沖地震10年後の災害記憶と防災意識 —タイ国パンガー県の高校生を事例として—

金田 英子¹⁾

Disaster memory and disaster prevention awareness after the 2004 Sumatra
earthquake among high school students in Takua Pa, Thailand

KANEDA Eiko

Summary

Over ten years have passed since the Sumatra earthquake in 2004. In this study, we focused on high school students' memories of the 2004 disaster and their consciousness regarding future disasters. Study participants comprised 733 high school students from Takua Pa Senanukul School in Phang-nga province, Thailand.

A total of 11.3% (n = 727) of students remembered the tsunami ten years later, 55 (7.5%) students had a house destroyed completely by the disaster, and 53 (7.2%) received some damage. A total of 22 of the students who had their house completely destroyed by the tsunami remembered this occurring.

Regarding future disaster expectations, students who thought that a similar tsunami was possible within five or ten years comprised 61% (n = 716). Regarding disaster prevention, students who had chosen a meeting point with their family if a disaster occurred comprised 30% (n=659); those who had food for three days comprised 23% (n = 713).

Regarding participation in disaster prevention drills, those who answered, 'want to participate', 'do not want to participate', and 'either' were 52.2%, 7.5%, and 40.3% respectively.

It was clear that among the high school students, the memory of the Sumatora earthquake disaster had reduced and their consciousness regarding future disasters was low.

はじめに

2004年12月、インドネシア西部スマトラ島北西沖のインド洋を震源とするM9.0の地震が発生した。この直後にインド洋を大津波（波高2～10m）が襲い、タイ国でも大規模な津波被害を受け

た。とりわけパンガー（Phang Nga）県は被害が大きく、4,000人以上の死者を報告している¹⁾。さらにパンガー県のタクアパー（Takua Pa）郡で、もっとも児童・生徒数が多いTakua Pa Senanukul Schoolでは、当時、死者90人、30人以上が津波孤児となった²⁾。当校では現在でも、死者および

1) 東洋大学スポーツ健康科学（白山キャンパス）研究室 〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

Sports and Health Science Laboratory, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, JAPAN

表1 スマトラ沖地震の記憶とバイクでの海から居住地までの所要時間

	5分以内	5-15分	15-30分	30分以上
ある	25 (30.9%)	24 (29.6%)	17 (21.0%)	15 (18.5%)
ない	86 (14.3%)	106 (17.6%)	194 (32.2%)	216 (35.9%)
不明	3 (7.5%)	9 (22.5%)	14 (35.0%)	14 (35.0%)

n=723

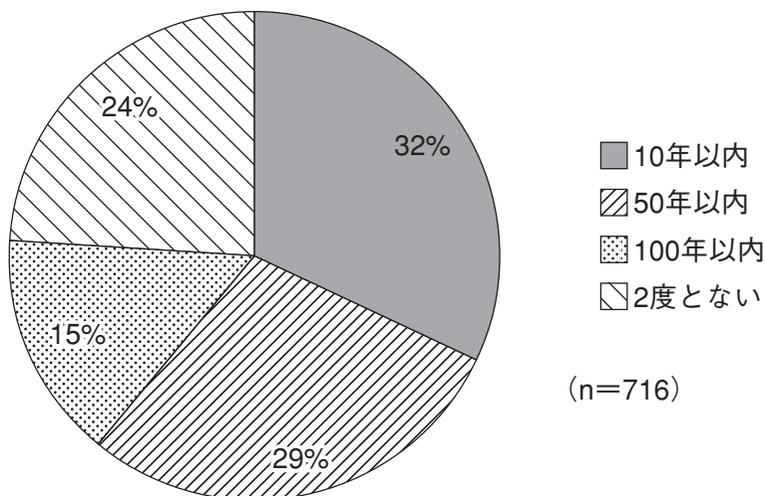


図1. 大規模災害の可能性

行方不明者の児童・生徒の顔写真とプロフィールをファイリングして事務室に保管している。しかしそのいっぽうで、カリキュラムの中で、地震について学習する機会はあるが、災害直後に実施されていた防災教育などは、今ではほとんど実施されていないのが実情である。

本研究では、スマトラ沖地震から10年が経過した現在、高校生となった生徒を対象に、災害体験記憶と防災意識について検討した。

対象および方法

パンガー県タクアパー郡の Takua Pa Senanukul School に登録をしている高校生848名を対象とした。

質問票は無記名で、質問内容は、居住地、当時の災害体験記憶、今後の災害に対する意識につい

てである。質問票は日本語からタイ語に翻訳し、学校の協力を得て、各学年集会の際、1学年一斉に行った。教頭先生の指示により担当クラス教員が、配布・回収を行った。その結果、744名の回収があった（回収率88%）。うち未回答が3名あった。その中で15歳から18歳の生徒を対象とした。それにより15歳未満と19歳以上の5名、および年齢無記入の3名を含む8名を除外し、733名を解析の対象とした。

また、本調査研究にあたっては、1) 参加は参加者の自由意思による。いつでも辞退することが可能であり、辞退してもなんら不利益は生じない、2) データは研究を目的とする場合以外に使用しないこと。また、その内容について守秘義務を遵守すること、について同意を得たうえで実施した。

結果

10年が経過した時点で、津波のことを記憶している生徒は全体の11.3%、覚えていないと回答した生徒は83.1%であった（ $n=727$ ）。海から現在の居住地まで、バイクでの所要時間により分類した生徒の津波の記憶は、表1のとおりである。海岸近くに居住している生徒ほど記憶があり、海岸から離れている地域に居住している生徒ほど記憶にない傾向がある。また、当時、家屋が全壊した生徒は55名（7.5%）、被害を少し受けた生徒は53名（7.2%）であった。家屋が全壊した生徒のうち、津波の記憶があると回答したのは22名だった。

今後の災害予想については、同様の津波が5年、あるいは10年以内に起きると思っている生徒が、全体の61%（ $n=716$ ）であった。

また防災対策について、災害時に家族との待ち合わせ場所を決めていると答えた生徒は、30%（ $n=659$ ）だった。さらに、災害時に備え、3日分の食料を備えていると答えた生徒は、23%（ $n=713$ ）だった。防災訓練について、今後、学校以外での防災訓練が開催された場合に、参加する意志があるか否かについては、参加したい（52.2%）、参加したくない（7.5%）どちらでもよい（40.3%）であった（ $n=719$ ）。

考察

10年が経過した今日、スマトラ沖地震の記憶をもっている生徒は、全体の約1割であった。さらに、発災当日は学校が休日であったため、子どもたちの多くは自宅にいた。それにもかかわらず、当時、家屋が全壊したほどの被害を受けた生徒であっても、約半数が当時の記憶を持っていないと答えている。しかしながら、そのいっぽうで、海岸近くに居住している生徒ほど記憶に残っている

ことが示された。阪神淡路大震災では、死者が多い地域ほど、震災モニュメントが多いという報告がある³⁾。これは、記憶を記録として語り継ぐ行動ともとれる。今回の調査地では、津波が押し寄せた海岸は、震災後整備され、巨大な仏陀像を置くとともに、打ち上げられた漁船や死者の名前が刻まれたプレートなど、メモリアルパークになっている。このような視覚的印象が、津波の記憶へとつながっている可能性がある。

ところでパンガー県はプーケット島の北に位置していることから、プーケット島からの観光客による観光産業も期待できる場所である。実際に、スマトラ沖地震の際、パンガー県における外国人死者が1,633名と最も多かった⁴⁾。日本の場合は、東日本大震災に見られるよう、被災地応援ツアーなど新たな観光戦略が実施されているが⁵⁾、現地では、津波被害の記憶を強調することで観光客が恐怖心を抱き、逆に減少してしまうのではないかという意見もあった。

今後の大規模災害の予測について、約6割が危機意識を持っているにもかかわらず、家族との待ち合わせ場所を決めている生徒は約3割、食糧を備蓄している生徒の家は約2割と、行動が伴っていないことが明らかとなった。もっとも、日本のように頻回に地震があるわけでもないのに、食糧の備蓄はすなわち、常時、余分に保存食があるかという感覚にとどまっているという見方もできる。

防災訓練については、参加する意思のある生徒が約半数いたいっぽうで、どちらでもよいと回答をした生徒が約4割いた。つまり強制的に参加を促せば、参加するという考え方の生徒が半数近くいることを示唆している。したがって、学校以外の場所、すなわち地域でも防災訓練を実施する意義は大きいと言える。

まとめ

10年が経過し、スマトラ沖地震は歴史的には記録されているが、生徒たちの記憶は薄れており、防災に対する意識も高くはないことが明らかとなった。今後は、学校教育の中での防災教育という観点を、まずは教師から積極的に意識する必要があると言える。

この10年での被災地全体の生活復興感をみると、総体的には限りなく平時に近い状況にあった。しかしいっぽうでは、災害復興事業により復興住宅での生活を続けている住民も少なくない。今後は、長期的な視野にたって被災者を見守り、被災体験を継承していく必要があると言える。

謝辞

調査にあたり、全面的に Bann Thai Namchai Foundation のスタッフの方々に協力していただ

き、感謝します。とくに、Rotjana Phraesrithongさんと Takua Pa Senanukul School の Niytaya Engsontia 先生には、調査にあたり全面的にご協力いただきました。

なお、本研究は、東洋大学の平成25年度井上記念研究助成を受けたものです。

注記および参考文献

- 1) 金田英子「スマトラ沖地震津波のその後—タイ国・ナムケム村— (調査報告)」東洋大学スポーツ健康科学紀要, 10号, 91-95, 2013
- 2) 現地, Niytaya Engsontia 教頭からの聞き取りによる。
- 3) 吉新雄太, 相澤亮太郎「震災モニュメントと記憶の諸実践: 慰霊と教訓, 継承と受容の間で」兵庫地理, 54: 9-19, 2009
- 4) 佐藤仁「スマトラ沖地震による津波災害の教訓と生活復興への方策: タイの事例」地域安全学会論文集 (7), 433-442, 2005
- 5) 岩手県北観光「被災地応援ツアー」<http://www.ken-pokukanko.co.jp/tour/> (平成28年1月1日現在)